

ねん がつ にち
2020年8月15日

せい ぼ ひ しょうてん さいじつ
聖母被昇天の祭日

きく ち いさおだい し きょう せつきょう
菊地功大司教 ミサ説教

せい ぼ ひ しょうてん いわ きょう がつ にち げんきゅう に ほん
聖母被昇天を祝う今日8月15日は、あらためて言及するまでもなく、日本
においては平和を祈念する日でもあります。

まいとし がつむいか ひろしまげんばく ひ がつこのか ながさきげんばく ひ へ がつ にち
毎年、8月6日の広島原爆の日から8月9日の長崎原爆の日を経て、8月15日の
しゅうせん き ねん び いた と お か かん に ほん きょうかい へい わ じゅんかん
終戦記念日に至るまでの10日間を、日本のカトリック教会は「平和旬間」
と定めています。

ねん がつ にち にち に ほん ほうもん きょうこう に せい みずか
1981年2月23日から26日、日本を訪問された教皇ヨハネ・パウロ二世は、自
らを「平和の巡礼者」と呼ばれ、昨年11月の教皇フランシスコと同様に、東京
だけではなく広島と長崎を訪れました。特に広島では、「戦争は人間の仕業で
す」という有名になった文言で始まる平和アピールを公表され、その中で繰
り返し、「過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことである」と世界
の人に向けて強調されました。

とう じ し きょうだん せんそう ふ かえ へい わ おも へい わ たん がんぼう
当時の司教団は、戦争を振り返り、平和を思うとき、平和は単なる願望では
なく、具体的な行動を伴わなくてはならないと考え、その翌年（1982年）か
ら、日本にとってもっとも身近で忘れることのできない広島や長崎の事実を思
い起こす8月6日から終戦の15日までの10日間を、「日本カトリック平和旬間」
と決めました。日本の教会にとって聖母被昇天祭は、平和旬間を締めくくる日
でもあります。神の母であり、教会の母であり、平和の女王である聖母マリ
アの取り次ぎによって、わたしたちが神の平和の実現に至る正しい道を見いだ
し、その道を勇気を持って歩み続けることが出来るように、祈り続けましょう。

ひろしまへい わ お きょうこう に せい かみ しん ひとびと む
広島平和アピールの終わりで、教皇ヨハネ・パウロ二世は神を信じる人々に向

けて、「愛^{あい}を持^もち自^じ己^こを与^{あた}えることは、かなたの理^り想^{そう}ではなく、永^{えい}遠^{えん}の平^{へい}和^わ、神^{かみ}の平^{へい}和^わへの道^{みち}だということに目^め覚^ざめようではありませんか」と呼^よびかけています。「神^{かみ}の平^{へい}和^わへの道^{みち}」とは、すなわち「愛^{あい}を持^もち自^じ己^こを与^{あた}える」行^{こう}動^{どう}である^{きょうこう}と教^し皇^{てき}は指^し摘^{てき}します。

あらためて言^いうまでもなく、教^{きょう}会^{かい}が語^{かた}る「平^{へい}和^わ」とは、単^{たん}に戦^{せん}争^{そう}や紛^{ふん}争^{そう}がな^いいことを意^い味^みしてはいません。教^{きょう}会^{かい}が語^{かた}る「平^{へい}和^わ」とは、神^{かみ}の定^{さだ}めた秩^{ちつ}序^{じょ}が実^{じつ}現^{げん}している世^せ界^{かい}、すなわち神^{かみ}が望^{のぞ}まれる被^ひ造^{ぞう}物^{ぶつ}の状^{じょう}態^{たい}が達^{たつ}成^{せい}されてい^る世^せ界^{かい}を意^い味^みしています。残^{ざん}念^{ねん}なが^ら、核^{かく}兵^{へい}器^きをはじ^めと^{して}人^{にん}間^{げん}の抱^{いだ}く不^ふ信^{しん}や敵^{てき}対^{たい}心^{しん}に至^{いた}るま^で、神^{かみ}の定^{さだ}めた秩^{ちつ}序^{じょ}の実^{じつ}現^{げん}を妨^{さまた}げる要^{よう}因^{いん}は、数^{かず}多^{おほ}く存^{そん}在^{ざい}しています。

その文^{ぶん}脈^{みやく}で、教^{きょう}皇^{こう}ヨハネ・パウロ二^に世^{せい}は、「愛^{あい}を持^もち自^じ己^こを与^{あた}える」行^{こう}動^{どう}が、神^{かみ}の平^{へい}和^わを实^{じつ}現^{げん}する道^{みち}の一つであることに気^きがつかうようにと促^{うなが}しています。

こ^{こと}し^しも^も梅^つ雨^ゆの^{かん}間^{かん}に^{かく}各^{かく}地^ちで^{しゅう}集^{しゅう}中^{ちゅう}豪^{ごう}雨^うが^{はっ}発^{はつ}生^{せい}し、^{とく}特^{とく}に^{きゅう}九^{きゅう}州^{しゅう}では^{おお}大^{だい}き^きな^ひ被^{はい}害^{がい}が^{はっ}発^{はつ}生^{せい}しました。^{くわ}加^かえて^{しん}新^{しん}型^{がた}コ^{たい}ロ^{さく}ナ^{けん}ウ^{がい}イ^{さん}ル^かス^{さん}対^{さん}策^かの^みた^みめ、^{みつ}県^{みつ}外^がか^らの^{あつ}ボ^ふラ^{あん}ン^こテ^えィ^きア^き参^き加^きが^お認^おめ^{ほう}ら^{けん}れ^{ない}ず、^か必^かず^たな^がの^さ助^さけ^あが^あ集^あま^らな^いい^ので^はな^いか^との^ふ不^ふ安^{あん}の^こ声^こが^き聞^きか^れま^した。^{じつ}し^{さい}か^し実^{じつ}際^{さい}には^お多^たく^の方^{ほう}が^{けん}県^{けん}内^{ない}か^ら駆^かけ^つけ^つ、^た互^たい^がを^さ支^さえ^あ合^あい^なが^ら、^ふ復^ふ興^く支^し援^{えん}の^{かつ}ボ^{かつ}ラ^{どう}ン^とテ^くィ^くア^く活^く動^くに^と取^とり^く組^くま^れた^とう^かが^いま^した。

ま^あさ^もし^く、愛^{あい}を持^もち自^じ己^こを^ぎ犠^{せい}牲^{せい}に^たし^なが^ら、^た助^たけ^もを^と求^{もと}め^てい^る人^{ひと}の^かと^ころ^へへ^か駆^かけ^つけ^るボ^{かつ}ラ^{どう}ン^{たん}テ^やィ^さア^{しょう}の^{しょう}活^{しょう}動^{ちょう}は、^{へい}単^{へい}なる^わ優^{こう}し^{ちく}さ^みの^ち象^ち徴^くで^はな^く、^{へい}平^{へい}和^わ構^{こう}築^{ちく}の^{みち}道^{みち}その^はた^らら^ない^この^とこ^ろで^あり^ます。

その意^い味^みでは、^{しん}新^{しん}型^{がた}コ^{かん}ロ^{せん}ナ^{しょう}ウ^たイ^たル^かス^か感^い染^{りょう}症^{かん}と^い闘^りう^い医^い療^{りょう}関^{かん}係^{けい}者^{しゃ}の^か方^か々^たは、^きま^きさ^{しく}危^{ちよく}機^きに^{ちよく}直^{ちよく}面^{めん}する^{すく}いの^あち^いを^{そん}救^{けい}う^もた^めに、^{じん}いの^りち^りへ^{よく}の^き愛^きと^き尊^{そん}敬^{けい}を持^もって^{じん}尽^{じん}力^{りよく}さ^れて^いる^のの^すで^から、^{かつ}その^{どう}活^{へい}動^わは、^や平^や和^{こう}構^{こう}築^{ちく}の^{みち}道^{みち}でも^ある^{とい}え^ます。^はその^は働^{はたら}き^に、^こ心^こか^ら感^{かん}謝^{しゃ}し^{たい}と^{おも}い^ます。

きょうこう きょうかい あら ふくいんせんきょう と く こぶ
教皇フランシスコは、教会が新たにされて福音宣教へ取り組むようにと鼓舞
し と てきかんこく ふくいん よろこ さい ご きょうかい ふくいんせんきょう かつどう
する使徒的勧告「福音の喜び」の最後に、「教会の福音宣教の活動には、マ
リアという生き方があります (288)」と記しています。

せい ぼ じんせい あい も じ こ あた い かた せい ぼ
聖母マリアの人生は、まさしく「愛を持ち自己を与える」生き方であります。聖母

 じんせい かみ へい わ こうちく みち きょうかい も はん しめ い
マリアの人生は、神の平和を構築する道として、教会に模範を示している生

かた
き方であります。

きょうこう せいぎ やさ ちから かんそう たしや む あゆ ちから
教皇フランシスコは、「正義と優しさの力、観想と他者に向けて歩む力、こ
れこそがマリアを、福音宣教する教会の模範とするのです」と指摘します。

その上で教皇は、聖母マリアは、福音宣教の業において「私たちとともに歩み、ともに闘い、神の愛で絶え間なく私たちを包んでくださる」方だと宣言します。

教会が模範とするべき聖母マリアの根本的な生きる姿勢、とりわけ「正義と優
 しさの力」は、ルカ福音書に記された聖母の讃歌「マグニフィカト」にはっ
 きりと記されています。天使のお告げを受けたマリアは、その意味を思い巡ら
 し、その上でエリザベトのもとへと出向いていきます。「観想と他者に向けて歩
 む力」であります。

マリアは全身全霊を込めて神を賛美するその理由を、「身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです」と記します。ここに、「謙虚さと優しさは、弱い者の徳ではなく、強い者のそれであること」を見いだすことが出来ると教皇は記します。なぜならば、マリアがこのときその身をもって引き受けた主の招きとは、人類の救いの歴史にとって最も重要な役割であり、救い主の母となるという、人間にとって最大の栄誉であるにもかかわらず、マリ

アはそれを謙虚さのうちに受け止め、おごり高ぶることもなく、かえって弱い人
たちへの優しい配慮と思いやりを「マグニフィカト」で歌っています。「強い者
は、自分の重要さを実感するために他者を虐げたりはしません」と教皇は指摘
されます。

そして「マグニフィカト」で MARIA は、御父が成し遂げられようとしている業、
すなわち神の秩序の実現とは具体的になんであるのかをはっきりと宣言してい
ます。

「主はその腕を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座か
ら引き下ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良いもので満たし、富め
る者を空腹のまま追い返されます」

教皇フランシスコが私たちに求めている教会のあるべき姿は、「出向いてい
く教会」です。教会は、貧しい人、困難に直面する人、社会の主流から外
された人、忘れられた人、虐げられている人のもとへ出向いていかななくては
ならない。この教会の姿勢は、聖母 MARIA の「マグニフィカト」にしっかりと根
ざしています。

わたしたちは、聖母 MARIA に導かれ、その生きる姿勢に学び、神の前に謙遜
になりながら、自分のためではなく他者のためにそのいのちを燃やし、「愛を持
ち自己を与える」ことを通じて、神の平和を確立する道を歩んでいきたいと思
います。聖母のように、「正義と優しさの力、観想と他者に向けて歩む力」
を具体的に生きていきたいと思います。

神の母聖 MARIA、あなたのご保護により頼みます。苦難のうちにあるわたした
ちの願いを聞き入れてください。栄光に輝く幸いなおとめよ、あらゆる危険
から、いつもわたしたちをお救いください。